經濟論叢

第七十九巻　第三號

故谷口吉彦博士、故松岡孝兒博士遺影ならびに署名

観光税の問題点……神戸正雄　1

米国海外投資の成熟と停滞……岡田賢一　14

財政学と国家認識……斎藤博　37

故谷口吉彦博士略歴・主要著書論文目録……　55
追憶文（石川興二・松井清・河野健二）

故松岡孝兒博士略歴・主要著書論文目録……　69
追憶文（中川与之助・中谷実・酒井一夫）

昭和三十二年三月

京都大學經濟學會

先生の末っ子の克彦君にばったり出会った。先生が亡くなられたことは、これでもはや決定的になった。わたしはどういって克彦君を慰めてよいか、言葉も出ないままに、連絡船にのり込んだ。暗夜の瀬戸内海はやや風が出ていた。高松桟橋についたときは、すでに十二時に近く、桟橋の駅はぐらく、そしてひどく寒かった。わたしは、何にともなくひどく腹立たしい気持になっていた。

先生は、学長官舎の奥の座敷で、床の間の前に横たわっておられた。顔をおおっている白布を奥様が涙ながらに取って下さった。先生は、まったく何事もなかったような平静な温顔であった。わたしは、自分が虚誕しているのを恥ずかしいように感じた。しかし、しばらく顔を上げることができないでいた。――

あとで人から聞くと、先生が亡くなられたのは、丁度、二年間の学術会議の任期がおわる直前であって、通知が学術会議にとどいたのがあと数時間で任期が満了するという時刻だったという。先生と学術会議については、わたしに思い出がある。いまでは三年前になるが、先生が学術会議に出られるという話しを聞いたわたしは、先生に出馬をやめられるように申しあげたことがある。たしか、堀江英一さんも同意見であったと思うが、しかし先生は結局、色んな事情もあって出馬され、全国最高ではなかったが、それに近いところで悠々と当選された。当選されたのちのある日、タクシーのなかで先生は「河野君だけ

思い出すままに

河野健二

谷口先生が亡くなられたという知らせを受けたのが一二月一二日の正午すぎ、松井教授および経済学部事務室と必要なうち合せをそこそこにすませて、四国行きの列車にのり込んだのが四時すぎ、半信半疑の気持をまだつよく感じながら、宇野駅におり立ったのが夜の十時すぎでもあったろうか。丁度、そこで

が反対だったが、どうだ当選したろう」という意味のことをわたしに言われた。松井・堀江両氏も同乗しておられたので、皆で声をたてて笑っただけで、話しはすんでしまったが、そのことを先生のなきがらを前にして、わたしは思い出していた。わたしは、一方では先生の当選をあやぶむという不そんな気持も少しはあったが、それよりも老後を静かに暮されて、長生きをしていただきたいと思う気持がつよかった。先生が亡くなられてのち、祭壇に飾られた先生の遺影に向いながら、わたしは学長という重責のうえに、学術会議の仕事もまた先生の健康に重荷ではなかったか、わたしが反対したのも理由がなくはなかった、などとひそかに思ってみるのである。

学術会議のことは一例でしかないが、わたしの知る先生はまったく生涯を多忙のうちにすごされた方であった。先生の研究室のドアは、在室されている時はいつも「多忙」の札が出ていたが、「営々たる努力」という言葉は、まことに先生を語るためにあるようだ。次々と新しい仕事にとり組まれるというよりは、仕事が先生を追いかけるといったほうがよい程だったが、しかし少しもそれを苦にされないで、むしろ仕事を楽しんでおられたようだった。だから、仕事のさなかで亡くなられたことは、先生にとってみれば、あるいは本望であったかも知れない。

しかし、それだけ忙しくされながら、弟子に向って、これこれの仕事をいつまでにしてほしいというような要求を少しもされなかったこともまた先生の大きな特徴であった。先生は、弟子の人格を十全に尊重して、まったくフリー・ハンドを認められた。わたし自身をとって見ても、先生の研究業績をひきついでいるとはいえないし、自分勝手な領域をあさってきたわけだが、その点について先生はまったく寛容であった。人はどういうかも知れないが、わたしは先生の寛容にたいして、深い感謝の念を今もって抱きつづけている。人間関係のうえでも、先生はデモクラティックな態度に終始されたと思う。家族にたいしてもそうであったようで、成人された息子さんの家庭を訪ねるときも、いろいろ気をつかわれたということをお聞きしたが、わたしにしてみたら、先生の寛容をいいことにして、ことに晩年は度々お訪ねして、相談や雑談のお相手をすることが少なかったことを申しわけなく思っている。

先生の学問については、松井教授が書かれるので、わたしは触れないが、ただ学問的態度について、わたしが感得した点を一つだけ挙げると、それは経済学の研究における現実主義的な態度ということである。イデーや公式や古典から出発するのではなくて、目の前の現実にたいする関心から出発して、解答や方針を求めようとする態度である。先生の出された解答や方針そのものがすべて正しかったとはいえないけれども、しかし現実から出発して、現実にたいして責任をとろうとする態度か

ら、わたしは多くのものを学び得たと思っている。これは、現在のわが国の経済学界にたいしても、学ぶべき多くのものを与えるのではないかと思う。

――とりとめもない感想に終始したが、先生を偲びつつ思いつくことの一端をしるした。先生の御冥福を祈る次第である。

（一九五七・一・三〇）